

新たな村づくりの展開方向

星 寛 治

私は35年ぐらいうつと農業をやる中でいろいろ模索してきました。そこで直面した現場の諸問題と、私どもなりに描いたこれからの新たな村づくりの方向について申し上げますので、それについてご助言をいただければありがたいと思っています。

私は、今の湾岸戦争は展開の仕方によっては、日本の農業あるいは農村社会に対して大変なダメージを与えかねないと心配しています。既に石油づけの生産体制、あるいは流通、消費という、現代人にとっては当たり前の生活パターンが当たり前でなくなる日が来るのではないか。そういう段階に、果たして敏感に対応できるのか、私ども現場にいる人間にとっても大変心配なところでもあります。

あるいは、グローバルな環境破壊というものが、人類にもたらす大変な影響に無関心ではおれません。それらの問題に対して、日本人は、案外、対岸の火事のような感覚を持っておって、特に若い人が立ち上がって戦争をやめてくれと大衆行動をするような動きも、ほかの国々に比べて非常に弱いんじゃないかということなども、我々の世代の老婆心の一つであります。

いずれにせよ、先の見えない時代になってきて、まさに転換期というか、あるいは世紀末というのをひしひしと実感するのであります。しかし、私はさまざまな紆余曲折を経ながらも、21世紀は、いろいろな矛盾を丁寧に丁寧に乗り越えていって、やっぱり生命というものが何よりも大事だという、そういう自覚が多くの人々の中に定着していって、生命の時代とでも言われるような、そういう資質を帯びた文明社会が訪れることを信じたいと思っています。しかし、現状では足踏みをし

ていて、環境問題がこれだけ騒がれているにもかかわらず、依然として大きな矛盾が頻発するという、人間の業のようなものに今、直面しているという感じがいたします。

ところで、私どもの村は山形県の内陸部の一番南の外れ、米沢市の近くの高畠町というところにあります。人口約2万8,000弱の農村地帯なんです。農家戸数が約3,000、水田が3,000ヘクタール弱、それにブドウ園が700ヘクタールぐらい、あとの畑地には特産のラ・フランスとかリンゴとか、あるいは野菜を加工する食品加工業なんかが発達しておったり、地酒とか、そういうもののメーカーなどが四つ、五つあるという、いわば地域複合の地帯であります。もちろん畜産もありまして、昔からの伝統的な酪農地帯でもあります。

そんな大ざっぱな状況の中で、しかし、最近20代の若者がほとんど農業を継がないという実態にぶつかっています。農業高校を卒業しても就農ゼロというのは珍しくありません。ほとんど地元の小さな職場というか、企業についてしまう。あるいは誘致企業なんかも大分立地しておりますので、通勤しながら容易に勤めることができるというような、そんな時代になっているわけですね。今頑張っているのは30前後から40代ぐらいまで、それが若手と言われる層であります。ですから、学卒者がほとんど農業につかないというのは私の町だけじゃなくて、全国おしなべて言えることなんじゃないかと思われます。

そのことが、あと数年後にどういう結果をもたらすのかということについては予測ができません。これは国内の状況と世界的なさまざまな大きな、構造的な変化の中で、若者がどうそれを受けとめて、みずからの課題とし

て選択するのかという、そのことにかかわっているわけですから、大人がどう言う言えるという問題でもないような気がしますけれども、非常に憂うべき時代が訪れているというふうには思われます。

ですから、生活感覚も非常に都市化しております、農村地帯にもスーパーがどんどん進出してあって、せっかくの自給菜、裏の畑に立派な野菜とか、あるいはザクロ類なんか豊かに実っているのに、若いお嫁さん方は、勤めの帰りにスーパーからパッケージされた野菜を買ってきて、畑の方は見向きもしないという、そんな光景も目につくようになっていきます。しかし、これは一般論でありますから、我々が目指す方向とは大分趣が違っております。いずれにせよ、現代社会というのは価値観が大変大きく分かれていく時代だと思われる。農業に対する取り組み、あるいは自分のライフスタイルにしても、どういう人生観と価値観を持っているかということによって随分分かれ、また変わっていく。一つの公式でくくれるような時代ではなくなったというふうに思います。

農業をめぐる大きな流れというのは、私は二つ出ていると思いますが、今主流になっている近代化、コストダウン、効率化、合理化、あるいは国際自由化に対応するという、その大きな流れがありますね。これに、いかに対応するかということに必死になって、いま日本の農村、農民は闘っているといっても過言ではないでしょう。しかし、私はその土俵に上げられてしまうと、横綱と序の口が相撲をとるようなもので勝負は決まっていると思っています。ですから、量の勝負とか、コスト競争には巻き込まれたくない。負けるとはつきりわかっている、そういう勝負に挑みたくないという思いが前からありました。国際化時代といえども、やはり質というものを前面に打ち出して、質と安全性を一番大事にするような生産のあり方、あるいは食べ物づくり

ということに一つの活路を見出してきた、いきたいと思っているわけなんです。

銘柄、産地については庄内の方がはるかに優位でありまして、日本一条件のいいと言われている庄内でさえも、今ご報告のような状況になっている。ササの王座が揺らいでしまって大変な混乱状態ですね。農協経済連は、いかにしてそれを乗り切るかということに必死になっている。非常に余裕のない状況に追い込まれてきていると思われる。既に米は商品化時代、市場対応ということを否応なしに迫られている段階になっていますから、それを避けて通るということでは成り立たないということだけは多くの人が認識するようにはなっていると思います。

ただ私どものように、伝統的に地域複合、あるいは個別的にも複合経営をずうっとやってきたところでは、必ずしも米単作の地帯のように右往左往はしていないという少し落ちついた、どっしりした姿勢もあるんです。しかし、依然として米が王座ではありますから、そこが揺らぐということは、そのほかの果樹とか、野菜とか、畜産部門も非常に不安定な要素を抱えてくる、そういう構造になりかねません。

今、農協の広域合併というか、再編成の動きが急速に高まってまいりまして、今まで一つの市町村に一つの農協というのは、おおよそそのスタイルでありましたけれども、数市町村がまとまって、いわゆる地方事務所とか、普及所単位ぐらいのところで複数の市町村が一つの農協でやっていこうとするような、ここ2、3年のうちにそれを実現しようというような動きが急速に高まっています。山形県の中央会は、県内で八つぐらいの単協にしたいという一つの青写真を打ち出しましたが、そうなりますと、私のところも2市2町ぐらいのところで1万数千人とか、2万人とかという組合員を抱える農協になっていくのかなというように思います。

しかし、これは、農家の立場から発想されて組織再編が進んでいくのではなくて、あくまでも農協の経営的な諸問題、とりわけ金融の自由化の時代になって、それを乗り切っていくために、やむを得ず捨て身の戦法でやらざるを得ないというような、そんなところが本音なのじゃなかろうかなと思います。

営農とか販売とかは、労多くしてなかなかメリットの少ない部門なものですから、農協は、今まで金融事業で稼いできたという現状があったんですが、それが単協、県連ともに非常に困難になって、むしろ赤字基調に転落しつつあるというような、農協経営にとって一つの天王山を迎えているわけですね。それを大型化することによって、市中銀行とか、大手金融と渡り合っていくとするような、そういうことなんじゃないかと受けとめます。しかし、そうすると、農家組合員と農協はますます離れていく趨勢にあるのじゃないか。借金をするとか、預金をするとかという時でないと農協に足を運ばないということになったら、本当に農民のための農協といえるのかというような問題が遠からず襲ってくるんじゃないかという危惧を持っている1人なんです。

そういう時代の中で、農協の中堅的な職員——組合員じゃなくて職員、30代、40代ぐらいのやがて課長とかの職を担って、農協の実務を全面的に責任を持ってやらなきゃいけないような世代が続々とやめていくんですね。これは全国的な傾向です。私の農協でも、これは余り芳しいことじゃないんですが、1年間に11名ぐらい中堅職員がやめてしまいました。近隣の市町村でも全部そうです。東北6県、同じような傾向を持っていると思います。役員というのは、ご存じのように、農家のおやじさん方ですから、そんな実務経験とか能力を持っていません。ですから、中堅的な職員の力によって農協経営というのは動いていくわけなんです。それがみんな歯こぼれし

ていくわけですから、これから非常に多難な時代になっていくという不安があります。

それ以上に私が心配しているのは、農業後継者なんです。このことによって果たして数年後、10年後、農村社会は存続できるのか、そういう瀬戸際まで追い込まれていくと思います。国とか地方自治体とか、あるいは社会資本の投下というような形でもって大変多額な投資が行われて、基盤整備とか、施設化というのが進んでいます。残念ながら入れ物づくりが進んでいっても、それを生かしていく人材が底をついてしまうと、それは空振りに終わってしまうという心配があります。

私の町で、平成元年度はたった1人しか新規就農者は残りませんでした。その前の年はゼロというような惨憺たる数字です。山形県全体では平成元年90名ぐらいですね。しかし、44市町村ありますから、平均一つの市町村で2名ぐらい。これは、ごく近い将来、地域農業を担っていく担い手の数、あるいは質的な面も含め大変心もとない、壊滅状態になるんじゃないかと思われれます。全国では、ご存じのように2,100人とか、あるいは、去年は1,800人とかという非公式の数字があります。

そういう実態の中で、世代交代の切れ目というのは、あと数年後に訪れるわけなんです。我々のような世代が百姓を退職するような時代に、果たしてそれをうまくバトンタッチして乗り切れるのかということになると、家族経営を守れというかけ声とは裏腹に、非常に困難な時代に直面する。それを補強するものとして集落営農あるいは農協の受託事業などさまざまな形態が考えられます。しかし、その段階でも、やっぱり人間がいなきゃだめです。中核的な若手のリーダーがかなりな数おって、それが集団とか、組織を引っ張っていくということでないし、実際に動いていかないと、農村社会は活性化していかないと考えられます。ですから、後継者の問題というのは、私は何よりも大変大事な、これからの課

題なんじゃないかなというふうに考えています。以上、一般的な状況を述べました。

ところで、私ども高畠町の中で、約20年ぐらい前から有機農業に目覚めて、まるで地べたをはうように変わり者扱いされながら今日まで続けてきました。しかし、10年ぐらいたって、なるほどそういう方法もあるのかという市民権を得ることができて、それからまた10年を歩んできて、そういう農業のあり方というのは、全国的なシェアからも、あるいは世界的な潮流からいっても、非常にまともな正しい道であるという、おおよその合意はできたように思います。

ただ、私どもの町でも20年かかって、やっと300戸ぐらいでしょうか、3,000戸の農家のうちの1割ぐらいしか、そういう方向に具体的に取り組んでいません。有機農業研究会はわずか50名、50戸足らずでありますし、あるいは上和田有機米生産組合とか、農業法人とか、あるいは会社組織で始めたところとか、地場産業と結合したグループとか、婦人のグループとか、全部含めて300戸ぐらいであります。しかし、非常にすぐれた、農業に意欲と誇りを持っている人材がそこに結集していますから、地域農業に与える影響は10%どころではない、30%とか、あるいはそれ以上の力を持っている。そして、逆転する時代が間もなくやってくるんじゃないかという希望的な観測を持っています。

この20年の歩みを一々申し上げる時間はございませんので、20年たった今、一体何が変わったのか、あるいはどういう方向にまた変わろうとしているのかということを考えてみたいと思います。まず何よりも自然の生態系といいますか、非常に豊かな自然というのがよみがえってきたと思います。広い町内に、ただ会員が点在しているという時代は、なかなかそうはいきませんでしたが、例えば上和田有機米生産組合のように地域ぐるみで、かなり広範な農家がそこに参画をして

まいますと、地域の環境が随分変わってきたと思われます。

表1は環境庁の国立環境研究所が恐らく日本で始めて行った本格的な生態環境調査の結果です。

最初に、ヌカエビテストをごらん下さい。これは十数年とか、20年とか完全無農薬で、つまり、農薬も、化学肥料も、除草剤も一切使わないという方法で米づくりをやっている有機農業研究会の田んぼの水を採取しています。それとの対照で空中散布をやっている平野部の田んぼの水を採取して、環境研でこれをビーカーに入れて、そこにヌカエビを入れます。ヌカエビというのは5ミリぐらいの小さなエビ——淡水魚ですけれども昔、全国どこの川や沼や池にも生息しておったそうですが、農薬とか化学物質に非常に敏感で弱い生物らしくて、ほとんど絶滅したそうです。そこで、環境研で養殖をして、辛うじて水質のテストとして使っているというわけです。

三つぐらいのビーカーにその水を移して、8匹ずつ一つのビーカーに放流をしまして、観察を1週間続けていくんです。私どもの水田の場合と、下の方の散布水田の場合の死亡率をごらん下さい。水は空中散布をやった8月10日前後に採取しています。私どものところは、全然空散の地域に入っていないから、1週間ずうっと観察しても全部100%生きており、死亡率ゼロという結果が出ています。ただ非常に注目すべきは菊池さんのところ、これは上和田有機米生産組合の組合長の田んぼなんです、空散をやっていないんです。無農薬田と除草剤1回の水田と両方テストしているんですが、初日に100%死んでいるんですね。全然自分の田んぼに使わないわけですけれども、ただ、これは周辺から水の汚染とか、あるいは大気汚染、空気の流れということなどもかかわって、こんな結果が出たという。彼は随分このデータにショックを受けていま

表1 高島町水田及び河川水中でのヌカエビの死亡率に関して(1989年8月)

氏名	採水場所	採水月日	1～7日後の死亡率(%)						
			1	2	3	4	5	6	7
星氏	水田(A)	89 08 11	0	0	0	0	0	0	0
	水田(B)	11	0	0	0	0	0	0	0
菊池良一氏	少農薬水田	89 08 12	100	-	-	-	-	-	-
	無農薬水田	12	100	-	-	-	-	-	-
中川氏	水田	89 08 09	0	0	0	0	0	0	7
	水田	11	100	-	-	-	-	-	-
須藤氏	水田	89 08 11	0	0	0	0	0	0	0
大木氏	水田	89 08 11	0	0	0	0	0	0	0
本田氏	水田	89 08 09	0	0	0	0	0	0	0
		11	7	73	80	80	80	87	93
菊池孝治氏	散布水田	89 08 12	100	-	-	-	-	-	-
稲子川	上流	89 08 11	0	0	0	0	0	0	0
		26	0	0	0	0	0	0	0
小学校裏	川	89 08 09	0	0	0	0	0	0	0
		12	0	0	0	0	0	0	0
中学校前	砂川	89 08 09	0	0	0	0	0	0	0
		12	0	0	0	7	36	36	57
		22	0	0	0	0	0	0	0
NEC前	砂川	89 08 09	0	0	0	0	0	0	0
		12	71	100	-	-	-	-	-
		22	0	0	0	0	0	0	0
小倉川	川	89 08 09	0	0	0	0	0	0	0
小ウラ?	川	89 08 26	0	0	0	0	0	0	0
		09 10	0	0	0	0	0	0	0
星邸前	小川	89 10 14	0	0	0	0	0	0	0
研究所	エビ飼育水	89 10 17	0	0	0	0	0	0	0

水のサンプル； 1989 10 17 高島町から到着後ただちにヌカエビ試験を行う。

試験法； 水 100mlをビーカーに入れ、生後4週間のヌカエビを8個体入れてその死亡を7日間観察した。1地点当り、2ビーカー(エビ；16個体使用)で試験を行った。死亡個体は観察時に除去した。試験は23°の恒温室で行った。

備考； 農薬空中散布の水田では、数時間以内に100%死亡した。

した。

それから中川さんという、もう20年、発足当初からやっているベテランの会員なんです。空散前に、つまり9日にとったのはほとんど生きていますね。最後にちょっと死んでいます。しかし、空散後、同じ場所で水を採取したのは、初日で100%死んでいるんです。須藤、大木というのは、私の近くのところですから、ここは全部ずうっと生きています。なんです。本田君というのも空散地帯です。中川さんと同じところ。空散前にとったのは大丈夫なんです。その後の7日目には大体ほとんど死んでいるという状態になりました。

その水田地帯を流れている最上川に注ぐ支流の砂川というところ、あるいはその支流の稲子川あたりの水を採取して、上流、中流、あるいは下流の方と、最終地点を幾つか設けて調査したのも、こんなデータになっております。下流に行くほど水の汚染がひどくなっているというようなことがはっきりと裏づけられていますね。

次に、そういう田んぼに生息している小動物、水生生物はどうなのかという点についてです。図は割愛して結論だけ言いますと、上流地域では生物相が豊かで種類も多い。それに対し、下流になって、工場廃液とか空散の影響とか、家庭廃液が流れ込んでいくところになると、ずうっと限られた生物相しか示さず、しかも数も大変少なくなっていることがわかります。

これらは、国の公的な、しかも専門的な研究機関が、かなりのエネルギーを注いでまとめてくださった調査結果でありますから、非常に信憑性が高いわけでありまして、近代農業の中で、我々の目にとまらないような小さな生物たちが、どんな影響をこうむって次第に絶滅していくのかということが、よくご理解いただけるんじゃないかなと思います。

私ども、トキとかカモシカとかの天然記念

物、そういうものについてはだれでもわかりますから、いろいろ論議します。けれども、土の中とか、水の中にすんでいる非常に大事な生き物たち、しかも稲とか、さまざまな作物とか、あるいは動物を育てる役目をしている生物たちの存在を、もう一度見詰め直す、光を当てていく必要があるんじゃないかと考えているところです。

ごらんのように、長年、できるだけ化学物質を使わない、あるいは全く使わないという方法で農業生産を続けていきますと、例えば、それは限られたスペースであっても、非常にはっきりした形で豊かな生態系、自然が戻ってくるということを証明していますね。私は極端なことを言うんですが、自分の寄って立つ1坪から始めればいいのじゃないか。一挙に町全体とか、県全体とかというふうに考えると、さまざまな諸問題があつて、全然踏み込めないということになりますから、自分の一番足元のところから、できるところから手をつけていって、それを着実に積み重ねていくという、そういう方法論が今、非常に大事なんじゃないかなと思っています。

米の生産技術に関しますと、最初は、切りかえた当初は、3割とか4割とか減少しておつて、かなり苦労しました。しかし、冷害に強い、干ばつに強いということがわかってきました。とりわけ東北を襲った4年続きの冷害が昭和50年代にありましたが、あのとき見事に乗り越えて、ほとんど安定的に平年作を確保したというようなことなどが大きな自信となって、その後、地域の中で注目されるようになってきたと思います。

私どもの有機農業研究会の稲作の場合は、種子の消毒から一切農薬を使いません。60度の温湯に5分間つけまして、それを、まだ冷たい水で洗う、それだけで、いもち病菌とか、ばか苗病菌をほとんど防ぐことができる。ですから、種もみの残りを人間がまた食べることができるわけですね。しかし、かつては水

銀、今はベンネットとか、そういうもので一旦処理しますと、残ったものは全部廃棄しなきゃいけないというようなことになります。ただ、いもち病なんかが、かなり激発しそうだという兆候があった場合には、人間も食べています玄米酢、それを150倍とか200倍ぐらいに薄めて2回ぐらい散布するというようなことで、かなり効果がありますし、あるいは去年あたりから、もくさく液を試験的に使いました。炭焼きの煙から採取するエキスですね。それからタール分を除去した、かなり純度の高いもくさく液をつかわないといけないんですが、これを2、3回使いますと、効果が認められるように思います。

また、果物とか、野菜とか、そういうものに対しても、非常にすぐれた効果を発揮する。これは、生理的な効果と同時に、病虫害に対する一定の抵抗力を示すというか、そういう効果と両面あるように思われます。例えばリンゴの葉っぱなんかが、従来のようなやり方ですと、ぼろぼろ秋口になるとこぼれ落ちるので完熟せず、本当においしいものはとれなかったんですが、もくさく液を3回ぐらい葉面散布しましたら、つやが出てきて、ちょうど椿の葉っぱのような、照葉樹林のような感じになって、紅葉する段階までちゃんと葉っぱがもちましたので、ひさびさにおいしいリンゴがとれたといって、消費者の方からは大変に喜ばれました。

あるいは、雑草対策というのは一番大変なんですが、私どもの場合は、丁寧に除草機を2回押しまして、つまり中耕除草をやった後、手でとるんですが、不思議なことに、10年を過ぎ、15年ぐらい経過した田んぼですと植生が全く変わってきていますから、草取りが随分楽になりました。例えば20アールぐらいの田んぼを、女の人であっても3人で半日ぐらいで終わってしまいます。かつては、家内と2人で四つんばいになって、来る日も来る日も格闘しておったものですが、10年、15年と

たつうちに、そんなふうには、土の状態が変わると同時に植生が変わり、こなぎなどの稲に相性のいい草が多くなってくると同時に、びしっと密生するということがなくなりますので、大変に楽になってまいります。

ただ、今、分刻みとかと言われる現代社会の中で、10年、15年、20年という、そういう物差しというのは、果たして現代人の生活リズムの中に入っていけるのかという根源的な問題はあります。けれども、一つの展望として、我々先駆けてやってきて、そういうところまで今到達した。将来は見えるのだということだけは、はっきり申し上げられると思います。

以上は、いわゆる農民的な技術の集積によって、もう一つの農業の体系をつくり出したということでもあります。ただ、稲とか、野菜とか、果物なんかの品種、育種技術というものについては、なかなか農民レベルだけではうまくいきません。ですから、官民一体となって、完全に無農薬でも病虫害に耐えられるような、非常にすぐれた品質を持ったものを、これからの先端技術も駆使して、つくり出させていただくことによって、飛躍的にそれは発展する可能性をはらんでいる。それを私などは期待を込めて望んでいる1人であります。

ところで、土が豊かになり、作物生産が安定してくると共に、農村生活も変わってきました。暮らしのわざというものを仕事に活かせるのも、有機農業の妙味であると思います。とにかく自前でつくり出し自給すること。我が家の自給、それから地域の自給、それをまた押し上げていって、国の自給をどんどん向上させる。今までとは逆の発想というものが求められるんじゃないかなと思います。

そして、農村風景も徐々に変わってきたと思います。五穀豊穡のような、その土地で育つさまざまな作物がつくられて、枝葉を茂らせ、花を咲かせて、実を結ぶ。それをまた摘んで、そのまま食べられる幸せのようなもの

を、本当はもっともっと大事にしていく必要があるんだというふうに思います。

それと、自前の流通を生産者と消費者が一体となってつくり出してきたというのが、一つの特徴としてあります。有機農業研究会だけでも、今、全国数十団体と産直提携のネットワークをつくり出しております。そのほかに、それぞれの生産団体が産直の相手を持っていますので、高島町全体からいえば、恐らく100ぐらいの大小さまざまなグループと産直提携のネットワークを結んでいると思います。

私ども、米については農協経済連の、いわゆる自主流通米のルートに乗せて産直米を一貫して流通してまいりました。最近、農水省の特裁米の方式がクローズアップされておりますけれども、設立当初から、協同組合運動の枠組みの中で有機農業を進めていこうとしてきましたので、流通についても消費者との契約をきちんとやりながら、それぞれのオーダーを農協に出していただき、きちんと届けるというスタイルをとっています。

東京においては農協が販売権を持っていないので、大きな米穀会社から小売店、消費者グループというふうに渡ってまいります。玄米で出荷したままの包装スタイルでいきますから、だれだれがつくったものだ、あるいはどういう品種なのかということも、すべてわかるような仕組みになっております。

ですから、今日、自前の流通、いわば小さな食管システムみたいなものをつくり上げてきたのでありますけれども、これは、恐らく70品目ぐらいに及んでいると思います。細々と野菜とか雑穀とか、あるいは加工品に至るまで含まれます。農家が自前でつくり出すことができるもの、あるいは地場産業と提携して安全性を確認できるもの、そういうものを全部、ルートに乗せているというわけでありま

す。

農村活性化のためには、どうしても農民の主体性を取り戻さなければいけないという考

え方に立って自前の加工所をつくって、冬場の仕事として漬物をやったり、みそを仕込んだり、もちをついたり、あるいはワインとか自然酒なんかを、地元のメーカーとの提携の中でつくり出したりというような、そういうことをやってきているわけです。

最近、おもしろいことに、東京都とか大都市で生まれ育った方々が、有機農業を志して私どものところを訪れて研修をしたり、あるいはそこに土着をして、新農民として頑張るというようなケースが徐々にふえてまいりました。数年もたちますと、世襲農民以上にすばらしい成果を上げます。川原さんという人が、私の歩いて5分ぐらいのところに土着したんですが、100年ぐらいたった小国という豪雪地帯の庄屋の家を解体して、移転して、復元した立派な家をつくったんですね。大体1.5ヘクタールぐらいの借地を中心として田畑を耕しているんです。将来は専業農民になりたいと言っているそうですが、今はだんなさんの方だけ高校の教師をしています。

新農民が、農村の本当のよさというのを我々以上に自覚しながら、今まで閉鎖的だと言われておった村社会の中で、非常に確かなインパクトを与え始めている。私ども都会に対して情報を発信するというのは非常に下手でありまして、こつこつとやっておりましたけれども、どこでだれが何をやっているのかということについては、ほとんど情報としては流れないところがありました。

しかし、これからは農村と都市との相互補完関係を新たにつくり上げていく段階になってきていると思います。それがないと村だけの力でもっては、なかなか突破できないような状況があります。今まで培ってきた信頼関係をベースにしながら、また新たな要素もそこに加えながら、新しい村づくりを模索してまいりたいと思っています。

時間がなくなってしまいましたが、新たな村づくりの展開方法ということについては、

有機農業運動をベースにしながら、ただ単に農業生産活動、あるいは食べ物を提携の中で届けるということだけにとどまらず、教育とか、医療とか、文化とか、福祉とか、そういう人間社会に不可欠な、とりわけ命とかかわっている、そういう社会的な領域を包括しながら新たな村づくりを構想してまいりたい。縦軸には老壮青少という、いわゆる四つの世代の世代間結合というものを描き、横軸には農を主軸にしながら、食べるという食生活と、

あるいは医療、教育、福祉、文化というような領域を配置しながら、それを有機的に結合させて包括していく、そういう図式を描いて今日に至っているわけであります。

ゆうき桃源郷づくりというのを上和田有機米生産組合を中心にしながら、これから考えていきたいと思って、本当のたたき台というか、私案でございますが、「ゆうきの里、桃源郷プラン」というのをメモ程度(資料1)にしたためてみました。このぐらいの素材があります。

<資料1>

ゆうきの里 桃源郷プラン(素案)

— 山形県高畠町和田地区を中心に —

構成素材

(たかはた共生塾、上和田有機米生産組合有志、高畠町助役、高畠町企画課、東京・久保田氏、松本氏、タウントラベルの小沢氏などの話し合いを土台にデッサンを試みた第一次素案です。)

1. ふれあいの森センター

山麓の大自然の中に山小屋風の拠点施設、150～200名位宿泊できるスペース、地域住民の研修・保養センター(生涯学習むら)、都市々民と農村の交流の場(墨田区区民農園など)、大学生のゼミ開設(セミナーハウス併設)、都会っ子の自然体験の合宿地、消費者グループ・生協会員との宿泊・交流、特別町民などツアーの受け入れ、その他多面的な活用(和田地区民俗資料館との連携)

2. 上和田有機米を核にした健康食生産の里

<米>

有機無農薬米、有機少農薬米(除草剤一回のみ)、黒米(中国の古代米、薬用米)、酒米(自然酒、純米酒)、有機玄米がゆ缶詰(黒米入り)、玄米ぼんせん(米菓)、玄米麺(生、乾麺)、黒米パン 他

<果物> 有機栽培の風味と安全性と多彩なフルーツの里『百果園』を構成(品種を含め100種を超える果物)

ぶどう(古くからの産地形成を生かす)、さくらんぼ、ラ・フランス(洋梨)、りんご、和梨、杏、李、梅、栗、柿、桃、花梨(マルメロ)、ナツメ、すぐり、ぐみ、キウイ、ブルーベリー、胡桃、あけび、山ぶどう、マタタビ、銀杏、かやの実、いちご 他

<野菜> 準高原野菜としての持ち味を発揮

すいか、メロン、トマト、カボチャ、ナス、きゅうり、青菜、白菜、ニラ、アスパラ、大根、長芋、にんじん、ごぼう、しそ、馬鈴薯、さつまいも、ネギ、枝豆、ほうれん草、紅花、食用菊、うど、みょうが 他、中国野菜、洋菜、山菜栽培（タラの芽、フキ）

<雑穀> 健康増進、薬膳、伝統食として復活（加工食材）

キビ、粟、コウリヤン、ゴマ、エゴマ（白油）、そば、大豆、小豆、インゲン（ささぎ） 他

<畜産物> 酪農の先進地、あるいは米沢牛背後地としての伝統

牛乳（乳製品）、牛肉、豚肉（自然豚）、鶏卵（平飼） 他

<山菜・野草> 奥羽山系、里山の四季の香り（多種）

<松茸・きのこ> 赤松の自然に自生する松茸の香りは、日本一と評定、広葉樹林に出るきのこ類も多彩

<地場産業及び手作り加工品> 北緯38°線の風土が育む素材を入念に作品化

地酒（自然酒）、ワイン、ジャム、ジュース（りんご、ぶどう）、バター、果実缶詰・瓶詰（ラ・フランス、桜桃 他）、チーズ、ミルクケーキ、ハム、ソーセージ、ベーコン、牛肉粕漬、鯉うま煮、そば（手打ち）、玄米めん、ボンせん、餅（各種）、みそ（手造り）、みそづけ、漬物（おみ漬、青菜漬、紅花たくあん、わらび漬、茄子の粕漬、朝鮮漬、大根の山ぶどう漬、他）、干物（くきたち、こめこめ、ぜんまい、すべりひめ、あけびの皮、他）

<薬草> 山野に自生する薬草も貴重な資源（多種）

3. めりはりのある自然、清流にしたしむ体験
4. 稲づくり、野菜、果樹づくり、家畜にふれる農耕体験
都会の子ども、大学生、消費者、市民のフィールドワーク
5. 収穫を楽しむ～自ら手をかけた作物の実りを摘む手応え
6. 農家民泊による生活体験と人間交流
7. 郷土（ふるさと）料理、自然食、薬膳食を楽しむ
グルメと健康
8. 温泉保養～まほろばの出湯（仮称）（一本柳）
湯沼温泉
吾妻山系の秘湯

9. まほろばの里めぐり（観光）

<ひろすけ童話 メルヘンの旅>

浜田広介記念館，文学碑をたずねる

<縄文から古代の旅>

日向洞窟，他，遺跡めぐり，歴史公園「風土記の丘」（着工），郷土資料館の参観，高島民俗資料館の参観

<心の旅>

亀岡文殊（日本三文殊の一つ）他，寺社仏閣（安久津八幡宮，高房神社，犬の宮，猫の宮など）

<芸術の旅>

歴史公園の中に文化村を，アトリエ・窯場での実技・観賞

<味覚の旅>

季節の旬の味，自然食，伝統食レストラン，料亭，家庭の味，土地の味，秘蔵の味

<健康の旅>

まほろばの緑道（サイクリングロード），スポーツ公園（野球場，陸上競技場，テニスコート），体育館，武道館，温水プール（全シーズン），登山（豪士峠，鳩峰，吾妻連峰），スキー（米沢スキー場，栗子国際スキー場），ゲートボール（農村公園，他），マラソン大会（高島ロードレース，女子マラソン，競歩全国大会）

<民俗，民話の旅>

炉ばたで語り部の話を聞く（和田民俗資料館，民家など）

<お祭り，イベント参加>

青竹ちょうちん祭り（400年の伝統），星まつり（亀岡文殊），わらじみこし祭り，火祭り（さいとう焼き），盆踊り大会（各地区），やまとの舞・延年の舞（安久津八幡宮舞楽殿），まほろば太鼓

<町文化ホール（800席）の建設予定>（平成4年度）

演劇・音楽の公演，文化講演，シンポジウム，各種大会・イベント・交流など

10. 都市と農村の交流

世代間の交流，相互理解の場（視野を広げ，地域を見直す），文化とわざの伝承

11. 工房における創る喜びの発見

農産加工，炭焼き，木工，わら工芸，焼物，草木染，手織り，盆栽，など

12. 物産の展示，即売

朝市・直売所，自然食の店，摘み取り園，果樹オーナー制度（自分の木），酒蔵見学

13. アンテナショップの開設（東京都内）

ふるさと産品のショーウインドー，純正の自然食品を主体に，手づくり工芸品，資料・案内図などの配布，たかはたツアーの企画

14. 特別町民制度の創設（会員制）

ふるさと運動の先進地に学ぶ，情報の発信，来町・滞在期間の優遇，集団・個人レベルでの新しい親戚づき合い，まちづくり・むらおこしへの参画

15. ふるさとの味，宅急便

まごころ便の充実，パック野菜などのステーション，土の文化をこめて，創意工夫で最高の自信作を届ける

16. 文化人村をめざす

ゆたかな自然の中に別荘地，都市から移住する人の受け皿づくり，新住民とのネットワークづくり，地域住民と共にあたたかい村を，地方から中央へ新しい波を送る

17. ゆうきの里 桃源郷づくり （第三セクター方式を考える）

地域住民の主体性，行政の企画力と推進力，都市市民・消費者・研究者・企業などの支援によって夢を実現

ですから，高畠町全域とはいきませんけれども，1,000戸ぐらいの和田地区というところは，少なくとも有機農業のメッカにしたいと思っています。非常にまだ水のきれいな，自然の豊かなところですから，ゴルフ場とか，産業廃棄物の処理場にさせてしまってはいけないという思いで，今まで徹底して阻止運動をやってきたんですが，阻止するためのマイナスのエネルギーだけ払っておっても決して活性化はしないので，先手を打って，自分たちが本当に何をやりたいのか，何をやるべきなのかという，そういうデッサンを描いて，行政と一体となりながら，あるいは都市の心ある人々のお力もお借りしながら，こういう素材を十分に生かすような，そういう新たな村づくりを構想してまいりたいと思っています。ところで。

時間が限られておりますので，これからの

展開の方向については，本当に輪郭を述べるだけに終わりました。このメモを後ほどご覧いただき，疑問やご意見などございましたら，一つご助言を賜りたいと思います。

○ 上和田有機米生産組合の事例のところで，レジュメの4ページ目の真ん中辺のところに，「今年，系統流通の壁にぶつかる」「特裁米方式が課題に」と書いておられます。この点をもう少しご説明いただきたい。

星 実はご存じのように，東北のササニシキが，自主流通米市場で大変な苦境に立たされたわけですね。それで，山形県の経済連と農協は，自主流通米にはササといえども一等米しか取り扱わない。二等米については，全部，政府米に回すという基本方針を決めたわけですが。ただ，我々のような無農薬米とか，低農薬有機米については，ちゃんと消費者が

決まって、春先から契約を結んで、オーダーもきちんと出していただけるのだから、それは別枠にして、二等米であっても何とか自主流通米で取り扱ってほしいと再三再四、農協あるいは経済連と交渉したのですが、理事会で大変な激論を交わした結果、それはだめだ。ほかの圧倒的多数の稲作農家がそういうことで我慢しているのに、有機農業をやっているおまえたちだけ特別扱いというわけにはいかないということで、二等米は自主流通米では一切流通できないということになったんです。

しかし、二等米も一定の割合で出しましたので、どうしようかというふうに頭を悩ませました。そして、結局、それを急遽、意識の高い消費者グループにお願いしまして、特裁米で何とか救ってもらったというのが実態です。

ですから、系統流通の基本路線は、我々は理解できるのでありますが、少なくとも、有機農業をこれから環境問題との絡みの中で、非常に大きなウエートを持って推進しなきゃいけないという時代の中で、農協にもう一枚、意識的に脱皮していただいて、消費者は二等米でもだめだなんて絶対言っていないわけですから、カメムシが1粒、2粒入っておっても何のことはないわけなんで、その辺のところを、ぜひとも改革してもらいたいなと思っています。ただ、来年に向けては、やっぱり自衛手段として特裁米の方式を春先から、もう少しウエートを高めて、自主流通米と平行するような形でやらざるを得ないというふうに、上和田有機米の幹部の方々は考えているようです。

○ 星さんは、農業と教育を結ぶ、あるいは文化とか福祉とか、そういうものを含めて、しかも、それは生産者だけではなくて、地域住民なり、都市の住民との交流も含めた、都市と農村の交流を含めた社会づくりを提起されています。その場合、特に有機農業にそういった面で積極的な意味や条件がもしあるのでしたらお聞かせ下さい。

星 実は私は、高島町教育委員にさせられてから15年と数カ月たつのでありますが、農村の子供といえども、都会っ子と余り変わらなくなって、自分の田んぼや畑がどこにあるのか、そこに今、何が育っているのかも知らないで、ただ、学校と家庭だけを往復している、そういう実態に憂慮を深めておりましたので、先生方全員が集まる機会に約1時間半ぐらい、耕す野の文化論という話を、15年ぐらい前にやったことがありました。

それ以来、小中学校11校あるんですが、全部の学校で学校農園というものを持って、発育段階に応じた農業体験の教育を正規のカリキュラムの中に組み込んでやっているんですね。低学年の場合は、PTAとか、よその力をかりないとできませんけれども、高学年、中学生になったら、全く自主管理できるという力を身につけていきますし、これは今、学力とか体力だけで切られてしまっている子供たちにとって、もう一つ非常に豊かな可能性をもっている子供たちもいるわけですから、その能力を発見し、伸ばしてやるという非常に大事な場になっている。

今まで肩身の狭い子供たちが、やがてリーダーになっていくという、そういう変身も至るところで見られましたし、そこでとれた米を東京墨田区の学校給食用に届けたところ、それが都会の子供たちの大変な感激を呼び起こしまして、交流が深まって、ついには夏休み1週間の自然体験教室ということで、高島に最初は50名、その後70名、70名というふうに来るようになりました。これはPTAなんかが中心になって受け入れたんです。

あるいは大学生のゼミが、2、3年前から次々と訪れるようになりました。前は、東京農大の奉仕会とか、農学部がずうっと十何年来ておったんですが、2年ぐらい前から、むしろそうじゃなくて、文系の学生、例えば千葉大の法系のゼミとか、あるいは早稲田の政経の西川先生のゼミとか、立教の学

生部が主宰する「環境と生命」というのに集まってくる学生たちが1週間ぐらい寝泊まりしながら、援農をしながら合宿をしつつ、農村体験をやっていくんです。

その報告書ができ上がっているんですが、本当に1週間の間で、都会の若者たちは変わります。立教の学生は、ことしの夏もまた来るといっていますが、3年目になりますし、帰りに、全員感想を述べて帰るんですけども、一生の仕事として農業をやりたいというふうに宣言した学生が3人ぐらい出ました。

そんなふうに、非常に感性豊かな若者たちというのは、環境問題に目覚め、命をはぐくむ農業が、その根源にあるんだということに気づき始めてきましたので、私は、それに次の時代への新しい芽生えというものを感じ、期待しているわけなんです。

そういう意味で、ほとんど有機農業を目指してくるわけでした、大規模な、企業的な近代農業を目指して農村に入ってくるという学生は、少なくとも文系の学生に限ってはほとんどいないんです。ですから、生き方の問題として、もう1度自分の足元から問い直してみようという、そういう動機を持って訪れるようであります。

ですから、教育運動としても非常に重要な意味合いを帯びてきたな、私どもは精いっぱいそれを受け入れて、今の若者たちとじっくり話し合う場をこれからもつくり出していかなきゃいけないと考えています。